

よりよい探究活動のために

# 課題研究通信

Vol.2

巻頭インタビュー

p.2-5

オックスフォード  
大学教授

## 荻谷 剛彦 先生

課題研究に取り組むにあたって ~イギリスより日本の教師・生徒へ~

後編

p.6-7

実践記録 鹿児島県立 甲南高等学校 後編

p.8-14

体験レポート 第3回 高校生国際シンポジウム

p.15

岡本先生に聞いてみよう

# 課題研究に取り組むにあたって

## ～イギリスより日本の教師・生徒へ～(後編)

『課題研究メソッド』を監修いただきました、社会学者の荻谷剛彦先生に、課題研究に取り組むにあたって求めたいことを伺いました。前回に続き、今回は「問い」についての考え方や、オックスフォードでの事例、高校で課題研究に取り組む意義などをご紹介します。



オックスフォード大学教授  
**荻谷 剛彦**

1955年東京生まれ。オックスフォード大学社会学科およびニッサン現代日本研究所教授。米国ノースウェスタン大学でPh.D.(社会学)取得。2009年まで東京大学大学院教育学研究科教授。専門は現代日本社会論、社会学。著書に『知的複眼思考法』『学校って何だろう』『階層化日本と教育危機』(大佛次郎論壇賞奨励賞)『大衆教育社会のゆくえ』『教育の世紀』(サントリー学芸賞)『Education Reform and Social Class in Japan』など。

### 1 「問い」をどう扱うか

#### 課題研究における教師の役割

生徒にテーマ設定などをさせる探究型の学習では、生徒自身が知識を組み合わせて対比させたりしてアイデアを生み出していく。しかし、初めて研究に取り組む生徒にとっては、そのアイデアが、研究として価値のあるものなのか、それともあまり価値のないものなのかを見抜くことは難しい。そこで、生徒のアイデアのどこが凡庸なのか、どこでつまづいているのかなどを見抜くのが、探究型の学習を指導する教師の仕事だ。

日本での探究型学習に対する誤解は、子ども達が小学校や中学校で取り

組んだ自由研究がモデルになってしまっていることが大きな原因の一つだろう。たいていの小中学校での自由研究は、とにかく好きなこと、興味の持てることを、方法もなく自由に取り組んで、おしまいにしてしまうというもの。これでは、「自由気まま」の自由さはあるけれど、「発想の自由」には至っていない。言い換えれば、このような自由研究は、いくらやっても発展性がなく、意味がない。それならば、ある程度の自由を制限してでも、しっかりと追究できたり探究できたりするほうがずっと学びにつながる。それに、教科書や、付随の資料集などを使って、取り組めばよい。その場

合、教師達は自分の担当の教科の中で、与えられた「問い」に対して、解き方を考えてみたり、変えてみたりすればよいだろう。個人ワークにこだわる必要もなく、何人かのグループで同じテーマに取り組んでも構わない。

#### どのように「問い」を立てればよいか

多くの場合、探究型の学習では、生徒が自分で「問い」を立てることが前提になる。最終的には自分で「問い」を立てられるようになることは大切だが、「問い」に向き合い、研究として高みに向かえるようになるには、まずは「問い」を人に立ててもらったり、同じ「問

い」に全員で取り組んだりしてもよい。そのほうが、先生達にとっても、課題研究を指導するにあたってのハードルが低くなるだろう。まずは、与えられた「問い」から入って、リサーチすることを身につけたほうが、結果的には意義のある学びにつながるのではないだろうか。探究型の学習のよいところは、正解のない「問い」を自分で探して解くことだが、下手な「問い」をオリジナルだと信じて立て、データ集めも議論も不完全で、そこから凡庸な結論に至ったとしても、自主的に取り組んだことにはなっても、知識の生産にはなっていない。

#### 書き手の立場を想像する訓練

加えて、伝えたい内容が見えてきたとしても、それを「書く」ことは簡単ではない。教材とする記事を読み、どのように書かれたかをトレースするときには、書き手の立場を想像しなければならない。こう書いたら読み手にどんな印象を与えるだろうか、ということを書き手は予測しているが、その時の想像力を言語化できないと、効果的な文章にたどり着くことはできない。情報の組み立てや順番には軽重があり、それを変えると、文章もまったくちがうものになる。その軽重を変えていく「演出」には、読み手が書いたものをどう受け取

るのかを読み取るような想像力が必要だ。

情報の組み立てを訓練するならば、最初は、時間軸や因果関係といった、順番でものごとを書いていくというような、わかりやすい組み立て型のロジックから始めるのがよいだろう。こういった基礎的なパターンができないと、高度なことはできるようにならないからだ。ほかにも、情報をいくつかのタイプに分類してみるなども初期の訓練にはふさわしいだろう。それを文章として自分で再構築するのを繰り返し行うことが、効果的な文章を書くためのステップになる。







## 2 オックスフォードで養われる探究力

### オックスフォードでの課題例

現在教えているオックスフォード大学の、社会学の大学院生に出されている課題で興味深いのは、「Duplication (複写)」というもの。教員が3つくらいのすぐれた論文を選び、学生は、その中から1つを選ぶ。学生には論文の中で使われているデータなどが公開されていて、それをを用いて論文と同じ結果を出しなさい、というものだ。この課題では、問いもデータも答えも与えられている。ただ、それをどうつなげていかを学生自身でやってみよということだ。

採点者として提出物を見てみると、優劣がはっきりとわかる。これは、ある程度複雑な分析をするものでないと成り立たないけれども、数量データに限らず、言説データを扱う場合にも応用可能だ。その場合は、異なる記事を使って同じ結果になるようにしなさい、などと課題を設定できる。自然科学ならば、研究の再現というのは当たり前の観点だが、社会科学でもそれは重要で、もとの論文の欠点や傾向も見えてくる。

料理を作るときに、材料もレシピもそろっていても、どんなものができあがるかわかっていても、プロが作ったものと同じものを作ることは難しい。それを学生にやらせてみるという課題なのだ。

### オックスフォードでの指導法

「Duplication」の例は社会学の課題だが、オックスフォード大学全体で、何百年と続いている指導の方法の一つに、「チュートリアル」というものがある。教員と学生が一对一で議論をするというものだ。一对一で行う議論なので、それに向かう学生も、事前に読んでいるものがなければ議論を成り立たせることができない。インプット能力がある程度鍛えられている人達が集まる場所だから、読んで、それをもとに書かせて、その書いたものをベースに議論をする。やはり、ここでも「読んで書く」部分が薄っぺらくなってしまうと、いくらオーラルで活動的に議論や発表をしているように見えても、学習は深まらない。

この観点は、日本の高校における探究型の学習においても同じで、研究発表の時などには、教師が議論の活発さ

ではなく内容にふみ込んだ見極めができるようにはならなくてはならない。そして、そのためにふさわしい教材を用意することが、議論の基盤となる「読んで書く」ことにつながるだろう。

## 3 高校で課題研究に取り組む意義

### 探究型の学習で到達すべきゴールとは

特に、社会科学系の分野において、高校生の課題研究や大学生の卒論くらいまでの研究は、本当にそれがすばらしい大発見になるということはほとんどない。経験の蓄積はどうしても必要だから、そう簡単にはアカデミック・ジャーナルに載るような研究ができるわけではない。探究型の学習で到達すべきゴールは、むしろ、「どのように何かを乗り越えることができたか」を身をもって体感することであり、凡庸さから抜け出す方法や、周りの人とちがった見方を探す方法、ほかの人がまだ気づいていなかった知識を探す方法などに気づき、そこで快感、感動、喜びを覚えることだろう。その、何か謎が解けたということについての喜びとはちがう、一

皮むけたような感覚を体験させるのが、大学教師の仕事なのだと思っている。

### どのように課題研究を進めるか

課題研究のテーマに適しているのは、学生たちが持ってきた材料であり、学生に課題研究の喜びを気づかせるためのファシリテーションをするのが我々、教師の仕事だ。いつもすべての学生にうまくいくとは限らないが、教師としては、なんとかその喜び、快感に連れて行ってあげたい。そこで一度でもわかった人は、次からは自分でできるようになるのだから。

だからこそ、最初のうちは、オックスフォードでの「Duplication」のように、すでにある研究の真似から始めるのもよい。高校の教科書レベルの知識だとしても、「なぜそのようなことが言えるのか」「なぜそのようなことが可能なのか」といった「問い」を使って、訓練することだって、十分に意義がある。「問い」を自分で立てたかどうかや、明確な答えがあるかないかが重要なのではなく、真似るといような訓練を通じて、自分でやらなくてはならなくなったとき

にそれができるようになっているかが大切なのだ。

### 社会科学のおもしろさ

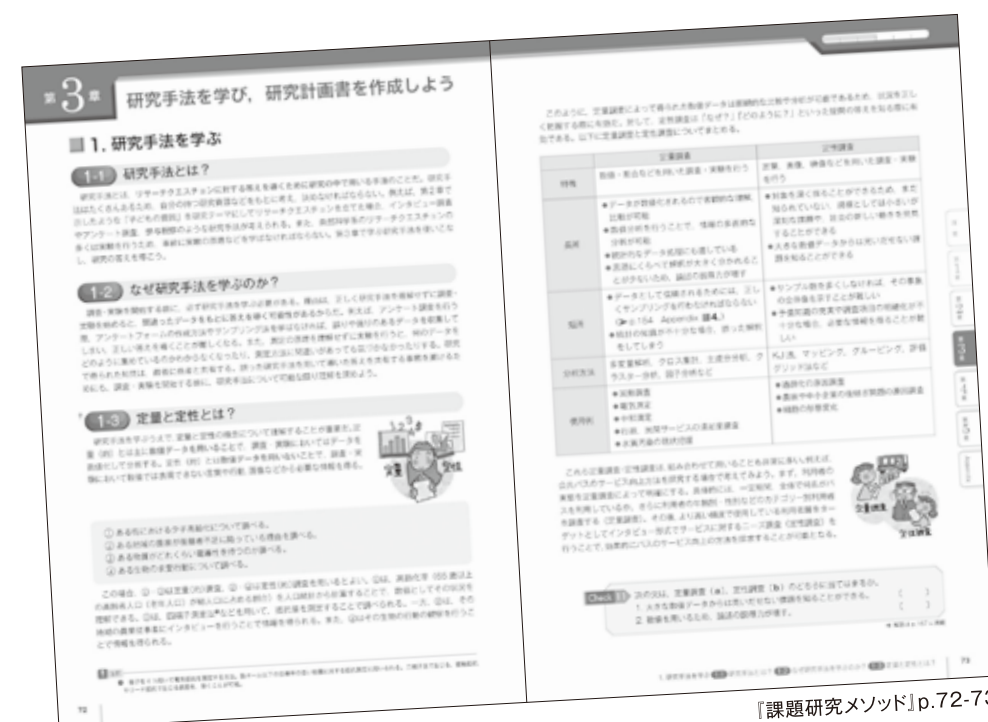
さらに、自然科学の分野のように、自然現象の中にある真理のようなものを発見できるのはちがって、社会科学の分野では変わりゆくものを見通したり、説明したりすることになる。自然科学の扱うユニバーサルな真理ではなく、ローカルと普遍の中間のようなどころを扱うおもしろさがある。私の場合は、それを自分の生きていく時代の中で、一緒に付き合いながら見ていくことによって、専門である日本の社会の特質を、変化を含めて描き出してきた。それを想像で作っているのではなく、ファクトを提示して説得力を持たせているから、受け手に納得してもらえる、説得できるものになる。

### 高校生に期待すること

高校生は、あと何十年も、社会や世界と付き合いながら生きていくことになる。そして、その社会の中で自分自身が作られていくし、自分が社会を作っ

ているという相互の関係を持っていくことになる。そんな関係性の中で、どうすれば社会との折り合いをつけられるかという個人的な問題も出てくるし、社会がまずい方向に進んでいたら、それをどうすればみんなで正していけるかという社会の側の問題も出てくる。これは、どのような立場になっても無関係では生きていけない問題だ。

少しでも、社会科学的なものの見方を身につけておけば、フェイクの情報によって価値判断がされそうときに、「ちょっと待てよ」と思えたり、そう言えたり、行動してひっくり返したりできるようになる。それによって、社会が緊張感を持って次の進歩をしていける。こういったことがなくなって一つのトーンだけで社会が動くようになってしまったら、どうなるか。それが一番怖いことだ。社会科学の学者にならなくても、自分たちの見方を変えられるような社会科学的なスキルを持つことで、高校生は、社会の変化を作り出す一人になっていくことができると期待する。



「課題研究メソッド」p.72-73



## 鹿児島県立 甲南高等学校（後編）

前回の『課題研究通信』では、鹿児島県立甲南高等学校でどのように課題研究が導入され、どのように実践されているかをご紹介しました。後編となる今回は、実際に課題研究に取り組んだ生徒たちの変化や、学校としての運営体制などについてご紹介します。



今年創立112周年を迎えた鹿児島県立甲南高等学校は、普通科の公立高校。生徒数は958人（2018年4月現在）。人間性“Humanity”、創造性“Creativity”、指導性“Leadership”を備えた生徒の育成を目指している。校訓の「剛明直、気高く優しく健やかに」をモットーに文武両道を体現している。きめ細やかな指導のもと、生徒は難関大学へも多数進学。平成27年にスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）に指定された。

課題研究を校内で実施する中で、生徒の変化（成長）を促すためには、モチベーションの維持・向上が非常に重要な要素となる。甲南高校SGH担当の先生方の話から、それを促す仕組みとその成果を垣間見ることができた。

### 1. 仕組み作りと生徒の変化

#### 生徒の変化を促す仕組み……

甲南高校では、1年生と2年生で、およそ4回ずつ、発表をする機会がある。2年間で合わせれば合計8回だ。校内の中間発表では、さまざまなフィードバックを受け、自分の現状を評価されるので、生徒達は自分自身の研究を改

善することができる。また、このような中間発表は外部の講師も招いて行うため、緊張感が生まれる。発表に向けた準備の段階から発表、フィードバックに至るまで、悔しや達成感など多くの感情が生まれるので、それが次へのモチベーションを生み出している。また、課題研究の発表成果で選ばれた一部の生徒は、イギリスでの研修に参加できる仕組みもあり、課題研究を開始する際のモチベーション向上と維持につながっている。

#### 通常科目でも見られる変化・主体性……

では、このような仕組みの中で、生徒にどのような変化が生まれたのか話を

伺った。まず出てきた点は、生徒達の思考がアカデミックになったという点であった。特に、シンポジウムなどの発表の場で生徒たちの発表や質疑応答を見ていると、彼らが論理的に話し、要点を押さえた話し方もできていることに気づいたという。

また、イギリス研修に参加した生徒は、勉強の大切さ、知識を蓄えることの重要性、英語を使えることの強みなどに気づいて、一人で積極的に学習することができるようになり、教員がひとつひとつ事細かに指導しなくても、自分たちで学習を進め、必要に応じて、だれに協力を求めたらよいか考えることができるようになったそう。英語の授

業中などでも、クラスメイト同士で、英語で話すことに照れたりためらったりする生徒がおらず、積極的に英語を使えるようになっていく。

また、一生懸命に課題研究に取り組むも、イギリス研修の選考の結果、希望が叶わなかった生徒の中には、選考発表後1週間も経たない間に、自分で「トビタテ！留学JAPAN」という、文部科学省が主体となっている留学促進キャンペーンを見つけ、応募していた者もいたそう。明確な目的を持って挑んだ留学は、得るものも大きかったという。このように、通常科目への取り組みはもちろん、主体性においても大きな変化が見られた。

#### 座学以外の経験を……

同高校の川上前教頭（現鹿児島県教育委員会高校教育課主任指導主事兼高校教育係長）は、課題研究を通して得る様々な経験は、必ずしも大学入試などに直接的に結びつく必要はなく、10年後、15年後といったスパンで、経験を生かせるようになってほしいと願っている。NPOやボランティアといった学外の人に話を聞いたり、他校の生徒と交流したりという、学校という枠内で座学を教えるだけでは収まらない経験を積ませることができることが、課題研究の重要なポイントなのだ。よって、高校3年生の夏休みに留学をしようという生徒がいても、大学入試の勉強が必要だからと引き留める教員はいなかったそう。

### 2. 課題研究の運営体制

#### 校内体制……

甲南高校では、校内で毎週行われる「SGH推進委員会」を中心に、課題研究の内容が協議される。この委員会は、教頭を含む16人の教員で構成されていて、高校3年間のおおまかなプログラムを決めている。細かい方針や内容については、学年単位で考えられてい

るそう。初年度は一部の生徒のみが課題研究に取り組んだが、今では、学校全体で課題研究に取り組んでいる。

#### チューター制の導入……

生徒によってテーマが異なり、答えのない「問い」を突き詰める課題研究は、生徒にも教員にも負担は少ない。ハードで、かつそれまでの学校生活ではなじみがない課題研究は、生徒にとって、優先順位も低くなってしまい、中には、ドロップアウトしてしまう生徒が出てくることもある。

そこで、甲南高校では、前述の仕組みに加え、ドロップアウトする生徒をできるだけ作らないように、チューター制を取り入れている。例えば、SGH対象の生徒には、2、3人の生徒につき1人のチューターの教員を、それ以外の生徒でも、35人程度の生徒につき2人程度の担当の教員をつける。チューターは、生徒の決めたテーマについて詳しい相談相手になるというよりは、むしろ、生徒の成果物を読んで気づいたことを「問いかける」ことが目的だそう。中身の筋が通っているかを見てくれる教員がいることで、生徒も相談をしやすく、教員も負担感を少なく指導ができるのだ。

特に、『課題研究ノート』を使いながらチュータリングをすることで、生徒たちを定点観測的に見守ることもでき、つまづいているようであれば、『課題研究メソッド』のここを読むとよい、などアドバイスができるという。

### 3. 課題研究の指導ノウハウ

#### 個人面談……

教員が熱心に指導しても、課題研究が苦手な生徒、ドロップアウトしてしまうようになる生徒は、どうしてもいる。そのような生徒をすくい上げるためのチューター制だが、それに加えて、課題研究の進め方が危なそうな生徒には、早め早めに個人面談をすることを意識しているそう。特に、書くことについ

ては、書きなさいと言われたからといっても、書けない生徒は少なくない。

また、設定したテーマが、課題研究に堪えうるものなのか、論拠が合っているのかという観点については、教員が目を配り、指摘するしかない。ほかの生徒の進捗具合と比べて、おくれを指摘するのではなく、全体のプロセスを示しながら、自分がどのような課題を抱えているのかを生徒に気づかせることができれば、生徒は自分で動き始められる。それでもわからなければ、また質問をしてくるので、その時には対応する。シビアに指摘をするポイントと、生徒に任せる部分を分けて考えているのだ。

課題研究に苦手意識を持つ生徒もいるが、教員側にも、課題研究について熱意や意欲に個人差がある。学校に課題研究を取り入れる際、立ち上げの中心となる教員は、課題研究についてのノウハウを蓄積することになる。しかし、その教員が異動してしまったら、学校にはそのノウハウが残らない。

川上前教頭は、中心となってきた教員がいる間に、次に中心となっていく教員を意図的に作っていくことを意識しているという。中心となっている少人数の教員のみで取り組むほうが仕事はしやすいかもしれないが、その教員が異動してしまえば、もう課題研究が続けられなくなってしまうからだ。実際には、教員も様々な業務を抱える中での取り組みなので、必ずしも簡単にできるわけではない。そこで、はじめは全員で薄く取り組んで、経験を積むうちに、だんだんと課題研究について受け持つ度合いを濃くしていけるようにしようとしているそう。はじめは取り組み方がわからず戸惑う教員も、生徒が課題研究を通して変容していく様子を見ていると、その重要性、必要性に気づくという。



## 第3回 高校生国際シンポジウム

1月31日と2月1日の2日間にわたり、鹿児島県で全国の高校生が課題研究の成果を発表する「第3回高校生国際シンポジウム」が実施されました。シンポジウムの様子、発表内容や講評などをご紹介します。



2018年で3回目を迎えた、今回の高校生国際シンポジウムは1月31日から2月1日にかけて実施され、北は北海道、南は鹿児島県まで、全23校の生徒が参加し、教員の観覧を含めると、30校を超える参加があった。

35組50名がスライド発表を、45組75名がポスター発表を行った。スライド、ポスターともに、各分野で8~13組が発表し、上位となった発表には賞が贈られ、さらに各部門の最優秀発表にはシンガポールで行われるGlobal Link Singaporeへの参加資格が与えられた。

スライド発表の部	ポスター発表の部
「国際問題・環境」分野	「地域問題」分野
「地域活性化」分野	「国内社会問題」分野
「国内社会問題」分野	「文化・教育」分野
「自然科学」分野	「自然科学」分野

今回のシンポジウムでは、後述の講演、パネルディスカッションのほか、大学の教員などの有識者を中心に、オープン・シティ研究所所長、元世界銀行副総裁の日下部元雄氏、オックスフォード大学日本事務所代表アリソン・ピール氏、愛媛大学教授の隅田学氏など、29名の審査員が、発表形式やテーマに分かれて審査を行った。研究の背景や目的、研究手法と、得られた結果の考察、結論といった研究内容の評価に加え、スライドやポスターの体裁、プレゼンテーションの技術などが評価基準となり、部門ごとの審査員で審議をしながら、各賞の決定がされた。

過去の高校生国際シンポジウムにて表彰された生徒には、研究成果をまとめ上げ、大学の推薦・AO入試に活用し、東京大学や京都大学へ進学した生徒も多くいる。教育改革・入試制度改革において、全国的な大会での実績が進学条件に加味されるようになるため、今後このような大会への参加・表彰実績の重要性はますます増すことが予想される。

### 基調講演

大阪大学副学長 小川 哲生 氏



基調講演で、小川氏は生きる目的や、何のために勉強をするのかについて語った。学校での勉強は、自分の知らない知識・知恵をインプットするためにある。それをもとに、自分なりの方法で価値を創造する「アウトプット」こそが「生きる目的」だと語る小川氏の声には、熱がこもる。創り出す価値の大きさに軽重はないが、「新しく重要」という2つの要素をそろえた価値を創り出すことが大切なのだ。

また、欧米諸国に追いつくことを重視した、かつての日本社会とちがいが、現代、そして未来の社会では、「何をするか」の見極めが必要である。したがって、新しく重要な価値を創造するためには、細かく深く一つのことを突きつめる「虫の眼」、科目や分野に壁を作らず、全体を俯瞰し、社会の中で自分のプロジェクトがどのような位置づけにあるのかを見極める「鳥の眼」、そして社会の動きや流れをつかむ「魚の眼」の3つの眼を使いこなすことが求められている。

淡々とした勉強が生きる目的なのではなく、それを手段として使いこなし、新しい価値をアウトプットするような人になってほしい、と言う小川氏の講演は、高校生たちの顔を、神妙にさせていた。

### パネルディスカッション

東京大学 名誉教授 益田 隆司 氏  
 オックスフォード大学 日本事務所 代表 アリソン・ピール 氏  
 愛媛大学 教授・愛媛大学附属高等学校 副校長 隅田 学 氏  
 シュプリンガー・ネイチャー社 宇津木 光代 氏  
 オープン・シティ研究所 所長 日下部 元雄 氏  
 (司会)  
 一般社団法人 Glocal Academy 代表理事 岡本 尚也 氏

上記5名をパネリストに迎え、「高校生にいま必要なこと」が語られた。現在、日本ではグローバル人材の重要性が目立っているが、教育現場では語学に着目されることが多く、本来なら必要な、「専門性」についてはあまり語

られない。そこで、「内発的動機づけ」をキーワードに、専門性をどのように身につけるか、日本やイギリスの大学での内発的動機づけへの視点や実践、日本の学術界の論文出版数が横ばいである現状と国際競争力について語られた。これからの社会で必要な力を身につけるには、専門性と創造性を身につけなければならない。それには、単純な報酬ではなく、個人が自ら意欲的に没頭できるようになることが大切だ。社会との付き合いの中で見つける興味や関心を育て、それが周囲から認められると、自信や意欲につながるのだ。また、ローカルなことを知ったうえでグローバルな視点も身につけることで相対的な視点を身につけることの大切さについての意見が交わされた。ディスカッション後の質疑応答では、参加した高校生が次々に手を挙げた。意欲的な質問と返答は、まさに内発的な疑問が言葉になり、交わされた場面だった。



### ゲストスピーチ

東京大学名誉教授 益田 隆司 氏

2日目には、東京大学名誉教授の益田隆司氏によるゲスト講演があった。若い頃の時間の使い方の大切さ、自分で考え抜くことの意味、そして時代や環境に流されず、自分の好きなことを見つけてその道に進むことの重みが、柔らかく親しみやすいトーンで高校生に話された。時折、聴衆の生徒に声をかけながら語られる講演中には、何度も聴衆の笑い声が弾けた。基礎的な勉強で自分のレベルを高めることは大切だが、それに加えて、いつか見えてくるであろう、本当に好きなことをやり抜くことが重要だ。それによって、他人の土俵ではなく、自分の土俵で生きることが出来る。それは、だれにも負けぬ分野を作ることだと、益田氏は語った。





## スライド発表

スライド発表の部は、「国際問題・環境」、「地域活性化」「国内社会問題」「自然科学」の4分野に分かれて行われた。各分野から1組ずつ、最優秀賞・優秀賞・優良賞が贈られ、各部門の最優秀賞受賞者の中から1名がグランプリとして表彰された。

### 「国際問題・環境」分野

9組が発表。移民や難民に対する世の中の姿勢や、受け入れの提案、多文化共生といった民族や国家に関わる問いを立てたグループや、教育・ジェンダーに関わるテーマを選んだ生徒、世界的な飢餓の問題に向き合った生徒、海を環境を保全・改善するための提案などが発表された。

### 「地域活性化」分野

9組が発表。テーマは、地域の文化的・地理的資源を使った過疎化対策、地域にあるエネルギーの活用、地産地消の促進、保育や子どもの貧困・生徒の話し合い活動といった教育に関するテーマなどが発表された。

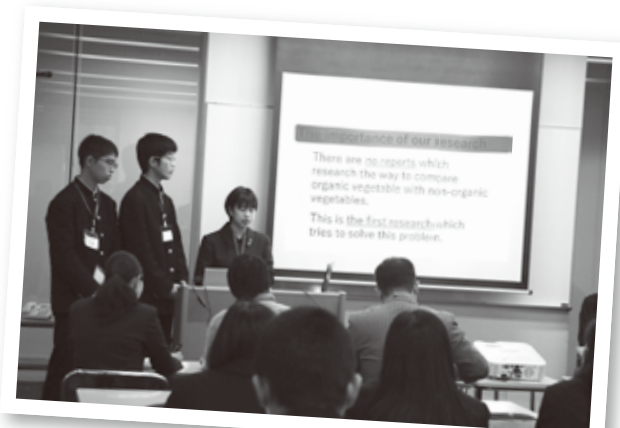
### 「国内社会問題」分野

9組が発表。若者に関するテーマとして、給付型奨学金普及や学力格差、体力向上、献血の推進、活字離れといったトピックや、食をテーマにした、食品廃棄や災害時の食料問題といった問題意識、そして、医療をテーマにした、未病への着目やアレルギー疾患対策といったトピックが発表された。

### 「自然科学」分野

8組が発表。人の健康や環境に安全な殺菌方法や農業の手法、洗剤作りといったテーマや、テロ対策、ボウフラ・マダニの低コストの駆除、紫キャベツの色素の変化、金属パイプ中を落下するネオジム磁石球の終端速度の測定などが発表された。

多くの発表では、文献調査に加え、自らインタビューやアンケート調査、社会実験、科学実験を取り入れ、自らの立てた問いに向き合い、考察し、結論、そして将来への提言がされた。英語で発表をする生徒も多く、調査やまとめといった課題研究の内容の成果発表にとどまらず、英語の勉強の成果も発揮されていた。



## ポスター発表

ポスター発表の部は、「地域問題」「国内社会問題」「文化・教育」「自然科学」の4分野の発表が行われた。ポスター発表の部からも、各分野から1組ずつ、最優秀賞・優秀賞・優良賞が贈られた。

### 「地域問題」分野

12組が発表。人口減少・流出の対策や、特産品の世界への発信、遠隔医療、環境に目を向けた自動車利用削減、環境と経済の関連、希少種の保全、そして商店街や買い物について、多様なテーマと幅広い視点での取り組みが見られた。

### 「国内社会問題」分野

11組が発表。リサイクルや節水といった環境のトピック、飢餓問題とSNSの活用、DVやシングルマザー、保健所の犬、要介護者といった弱い立場の人への支援のテーマ、睡眠への着目や介護職従事者不足の問題などのテーマが見られた。

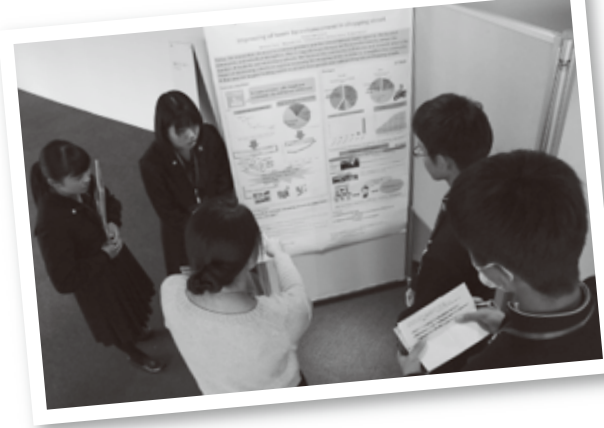
### 「文化・教育」分野

9組が発表。主権者教育や日本語教育、特別支援教育、生物多様性を広めるといった教育のテーマや、オリンピック、温暖化抑制のためのエコバッグ推進などの社会のテーマ、英国ロックや書道といったアートのテーマなどが発表された。

### 「自然科学」分野

13組が発表。オゾン濃度測定器やUVB測定器、雨量測定システム、簡易ろ過装置などの開発に挑戦したグループや、振り子の共振や緑のカーテン、クラドニ図形の研究、歴史的資料から読み解く気候などの発表があった。

話し手と聞き手の距離が近いポスター発表では、発表後の質疑応答の時間には審査員だけでなく、他校の生徒が積極的に質問を投げかける様子なども見られ、生き生きとしたやり取りが見られた。また、発表前には生徒同士で練習を見てアドバイスをし合う様子などもあり、積極的に発表をよくしようという姿勢があった。英語で発表する生徒が多く、グループでの発表をした生徒は、発表にスキットを取り入れるなどの工夫も見られた。





## 授賞式

2日目の午後に、授賞式が行われた。スライド・ポスターの両形式から、各分野について、以下の発表に賞が授与された。

	分野	最優秀賞	優秀賞	優良賞
スライド発表	国際問題・環境	山村 美南 (名城大学附属)	竹原 萌奈美 (甲南)	中村 響 (鹿児島修学館)
	地域活性化	成瀬 茉倫 (大島北)	新田 笑花 他 (鶴丸)	河野 真依 (五ヶ瀬)
	国内社会問題	中村 香凛 (五ヶ瀬)	上床 蘭 (甲南)	大西 康介 他 (鶴丸)
	自然科学	安田 千智 (甲南)	嶋元 健人 他 (宮崎大宮)	牧野 楓也 (札幌日本大学)
ポスター発表	地域問題	狩野 愛 他 (甲南)	福永 省吾 (甲南)	河野 由佳 (済々黌)
	国内社会問題	児玉 青莉 (甲南)	郡山 愁麻 他 (甲南)	竹山 英里 (甲南)
	文化・教育	辛島 綺羅里 (甲南)	荒谷 知弥 (甲南)	樋口 尚宏 (甲南)
	自然科学	上戸 智香 (甲南)	笹山 順平 他 (宮崎大宮)	池田 梨音 他 (宮崎大宮)

スライド部門の「地域活性化」分野で「地域資源の活用による奄美の過疎対策」というテーマに取り組んだ、大島北高等学校の成瀬茉倫さんがグランプリを受賞した。

成瀬さんは、高齢化が進む奄美大島は将来的に人口が減少する一方で高齢者の割合が大きく増加するというデータをもとに、将来の過疎化について問題意識を持った。行政の取り組む過疎化対策とは異なる視点での過疎化対策を探すため、地域の文化的、地理的な資源を生かして移住者を増やすことに着目し、研究を進めた。実際に地域の住民や、移住してきた人へのインタビュー調査などを実施して集めたデータをもとに、成瀬さんは、ただ単に人口を増やせばよいというものではなく、奄美大島の地域になじみ、家族のように生活していける町づくりが大切であるということに至った。各賞授賞式のあとは、グランプリ受賞者によるプレゼンテーションがあり、成瀬さんは大ホールの聴衆の前で、堂々と自らの研究を発表し、拍手の喝采を受けた。



## 交流会

1日目の夜には、参加した生徒や審査員が一堂に会した交流会が行われた。ちがう制服を着た生徒達が集まり、すでに発表を終えた仲間をねぎらい、翌日に発表をする予定の仲間を勇気づけた。顔見知り同士の生徒が集まって話すだけでなく、初対面の他校生と話す生徒が多く、出身の地域の話や、それぞれの取り組んでいる課題研究の話、高校卒業後の進路や将来の夢などがにぎやかに語られていた。

シンポジウムの審査員も交流会に加わり、生徒たちは、積極的に審査員の先生にも話を聞き、研究のアドバイスをもらったり、先生の研究内容を興味深そうに聞いたり、進路の相談をしたりしていた。参加していた審査員もうれしそうに生徒たちの問いかけに応じ、発表時の緊張した雰囲気とは一変したリラックスした様子で、意見を交わしたり、生徒に新たな問いを投げかけたりした。

発表を終え、各賞が発表されたあとは、生徒たちから頑張れたという誇らしげな声や、思うようにできず悔しがる声なども聞かれた。熱心に指導してくれた先生へ報いることができなかつた心残り、本当に伝えたいと思ったことが伝えられなかつた反省など、思いはそれぞれ。その中でも、それを糧に、次の機会に思いを馳せたり、自分の学びになったと前向きに捉えたりする生徒たちの声も多く聞かれた。そして、翌年同じように課題研究に挑む後輩たちの糧になりたいという思いも見られた。課題研究は自分一人で取り組むものではなく、先生や、協力してくれる外部の人、学校の先輩など、たくさんの人に支えられたからこそ取り組めたのだということを生徒が強く意識していることがうかがえた。





講評  
オープン・シティー研究所 所長 日下部 元雄氏

課題研究発表の全体講評は、オープン・シティー研究所所長の日下部元雄氏。今回のシンポジウムは質が高く、受賞対象にならなかった研究にも、有意義で素晴らしいものが多かったとのことだ。研究発表の審査は一定の基準を決めて順位をつけるが、その基準は、課題の分野によっても変わるが、共通して重要なことは、研究の目的が社会のニーズを捉えたものになっているか、文献調査にとどまらず、自らアンケートや聞き取りでデータ収集をしたか、自分の研究テーマに重なる先行事例を参照できたか、研究結果をもとに提言をし、それを広める方法まで踏み込めたか、といった、課題研究に取り組むにあたって押さえておきたいポイントも紹介され、生徒達は熱心に聞いていた。

最後には、開催地鹿児島にちなみ、島津忠良公による島津家の家訓の「いろは歌」が紹介された。

いにしへの道を聞かなくても唱へても  
わが行に せすばかひなし

昔の知識を知ったり語ったりしたところで、自ら実践してみなければ意味はない。課題研究にもまさにつながる言葉だ。

主催者後記「課題研究とアイデアコンテスト」  
一般社団法人Glocal Academy 代表理事 岡本 尚也氏

全国の高校からご参加いただき、まことにありがとうございました。また、ご協賛、ご協力いただきました企業、関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

近年、課題研究をはじめとする探究活動が新学習指導要領でも中心的に取り上げられ、全国的な導入が進んでいます。それに伴い、課題研究について審査を行う発表会やコンテストが実施され、私自身、いくつかの会に参加し、前述のシンポジウムも主催しています。

その中で私が気を留めるものは、「アイデアを競う」という趣旨の大会です。この趣旨は、確かに、臨教審以降、教育政策の中で述べられている創造性や個性という言葉と合致しますが、一方で、大学進学を志向している発展途上の高校生に対する「教育的効果」を考えると、疑問符がつくものもあります。理由は、そのアイデアを生み出す「過程」が多くの場合で体系化できておらず、汎用性の低い「偶発的な結果」を中心に評価を行っているからです。課題研究などの探究活動で重視すべきは、その過程で何を学んだのか、そして、大学以降、社会人となったあとも続く「学びの土台」を作ることであると考えます。

例えば、アイデアコンテストでよく使用されるトピックである、社会課題の解決策を提示することを目的に課題研究を行ったとします。初めに、「解決策を考える」作業から入って生み出されたものの多くは、知識と理解が不足し、抽象的で凡庸なものになります。仮に、よい解決策が提示されても、なぜ、どのように、その解決策が生み出されたのを今後、再現できるほどに理解ができていないと、次への土台にはなりにくくなります。一方で、よりよい解決策を生み出すために、「現状と原因把握」の理解をその方法(例えば文献調査やインタビュー調査を通じた事例研究などの方法)とともに学び、実践した場合、たとえ、その結果が個性や創造性に欠けるものであっても、その「過程」で培った知識と理解を深めながら積み重ねていく基礎力は今後の土台となります。そして、成長の中で、その「過程の質」と「結果の質」が結びつくように学び続けてほしいと考えています。

短期間の審査会の難点は、その過程を審査の対象としにくい部分ですが、年単位で取り組み、指導を行う学校の中では、特にこの「過程」を重視して評価をしていただければと思います。研究ノートや研究過程を評価するルーブリック開発も必要でしょう。

来年度のシンポジウムでも、社会・人文科学系の分野、自然科学系の分野を設置し、幅広い分野の研究発表を募集します。たとえ、解決策を提示する課題研究でも、知識や理解をいかに深め、そのうえで活用できているかを重点的に審査を行う予定です。より多くの方々の参加をお待ちしております。

第4回  
高校生国際シンポジウムの開催について

第4回 高校生国際シンポジウム

主催：一般社団法人Glocal Academy

日時：2019年2月8日(金)、9日(土)

場所：サンエール鹿児島

参加資格：全国の高等学校およびそれに準じた学校  
エントリーについて：各校10発表まで。所定の研究要綱を2019年1月5日(土)(予定)までに大会HPより申し込み

詳細：大会HPアドレス

<http://glocal-academy.or.jp/>

詳細はコチラ



# 岡本先生に 聞いてみよう

回答者

『課題研究メソッド』著者  
一般社団法人Glocal Academy 代表理事  
物理学博士

岡本 尚也



## 学校の組織として、課題研究を効果的に進めるためにはどのようにすればよいですか？

現在、多くの学校現場から研修や講演依頼をいただいております。その前後に学校の現状をヒアリングしています。その中で、特に気になる点は、多くの学校で課題研究などの探究活動を年々進歩させる「仕組み」がなく、いわゆる「0→1」を繰り返しているという点です。担当者が変わるたびに引き継ぎが十分に行われず、その年度の担当者がほぼ0から構築することで、本来不要のはずの業務が発生するうえ、蓄積されるべきノウハウが蓄積しないということが多く発生しています。通常科目の場合は、担当者に一任し、口を挟まないとの不文律があるかもしれませんが、課題研究・探究活動の場合は、教科や学年の枠を越えて、その教育課程を成長させていくものです。では、この0→1の繰り返しを防ぐためにはどのような仕組みが必要か、ポイントは以下の3つです。

### ①資質・能力ベースの教育目標を設置する

新学習指導要領では「何ができるようになるのか」という文言とともに、学力の3要素が示されています。校訓や建学の精神は学校の「柱」となるものですが、これだけでは具体性に欠けることが多く、ひとつひとつの教育課程まで浸透している例は珍しいです。そこで、そのような概念的な教育方針を具体化させ、それを達成するためには「どのような資質・能力を育むべきか」という「実践的な教育目標」を掲げることが必要です。つまり、高等学校であれば3年間、中高一貫校であれば6年間、その学校の教育を受けると「何ができるようになるのか」を文言化するということです。これにより、通常科目や学校行事は何のために行うのか、課題研究をなぜ行うのが学校で明確になり、過去の踏襲で何のために行っているのか不明瞭な業務の精選の指針にもなります。まず、土台ともなる、この資質・能力ベースの教育目標の設置を管理職などが中心となって行うことです。

### ②教育目標が達成されたかを見直す機会を設置する

資質・能力ベースの教育目標が設置されると、それをもとにした課題研究のルーブリック作成、評価が可能となります。少し理想的ですが、教育目標の設置から、課題研究を実施し、作成したルーブリックを用いてその評価を行い、設置された教育目標が達成されたか、達成されなかった場合は、カリキュラム、教員の指導方法、教材等のどこに問題があったのかを明文化し、それらに改善を加える、という一連の作業が可能となります(改善点は年度途中にも記録しておきます)。特に、最後の見直しの機会は、年度末などに部会や委員会が中心となって行い、形だけの振り返りとならないように注意が必要となります。

### ③共有可能な資料を作成する

①、②で述べたことを可能にするには、校内で状況を共有・把握できる資料を作成することが必要です。例えば、拙著『課題研究メソッド』は課題研究を実施するうえで、多くの学校において指針となることを目的に書きましたが、学校によって教育目標や生徒の現状は異なります。そのため、『課題研究メソッド』とその学校の生徒、教育目標をつなぐ簡単な資料が必要となります。もし、課題研究を実施して、その教育目標が十分に達成されなかった場合は、その資料に改善(その学校の生徒の見られる傾向、陥りやすい点など)を加えていきます。そして、それを次年度に引き継いで、改善を繰り返します(ルーブリックやカリキュラムも同様です)。このように共有できる資料がなければ、改善を加える対象が存在しません。初めは大変に思えるかもしれませんが、本当に簡単なものでよいので、ノウハウを蓄積させるためのものとなる資料の作成をお勧めします。



# これからの社会で役立つ力を、この1冊で



A4判・カラー刷

## 課題研究メソッド ～よりよい探究活動のために～

岡本 尚也 著 168頁／定価 本体1,500円+税

- ① 文系・理系の課題研究に対応
- ② 課題発見～研究発表までの流れを、段階をふんで理解できる構成
- ③ 課題研究に取り組む意義や概要、研究手法を系統的にわかりやすく解説
- ④ 豊富なAppendixや事例、ワークシートで、生徒の理解をサポート



A4判・1色刷

### 『課題研究メソッド』 完全準拠ワークシート集 課題研究ノート

56頁／定価 本体300円+税

- ① 『課題研究メソッド』に準拠したワークシート集
- ② 課題研究のポートフォリオとして、大学の推薦・AO入試対策に



『課題研究メソッド』の指導をサポートする教師向けデータ集

### 課題研究メソッド 指導用DVD-ROM

定価 本体7,000円+税

本文データ、シラバス案、指導案、授業用プリント、評価規準、授業用パワーポイント、解説動画などを収録

新刊

## 課題研究メソッド Basic (仮称)

～思考力・判断力・表現力を育むトレーニング～

岡本 尚也 著 96頁(予定)／定価 未定

- ① 課題研究に取り組む中学生～高校生対象
- ② 文系・理系の課題研究に対応
- ③ 課題研究に取り組むうえで必要な力を、ワークシート形式で、楽しくトレーニング

Now  
Printing

2018年下旬 発刊予定!

A4判・カラー刷

※制作中につき、発刊時期・仕様などは変更になる場合があります。